

2003年9月19日

宇山 智彦

われわれはこれまで、「中域圏」という概念を申請書作成のためにやや単純化して使ってきた。今後はこれを相当修正し、研究のための概念として磨いていく必要がある。

隣接外部世界からの力で中域圏が生まれた、という考え方がまがりなりにも成り立つのは（これも相当の留保が必要だが）、中東欧だけだろう。中央ユーラシアや極東・シベリアに南や東の隣人たちから働いている力（ちなみに、これを遠心力と呼ぶのは不正確である）は弱く、それによって新しい地域が生まれているとは到底言えない。

特に、中央ユーラシア中域圏がイスラーム圏の引力ないし求心力や、イスラーム復興によって生まれたという考えは不適當である。まず、中央ユーラシアにはグルジア、アルメニア、カルムイキアなど非ムスリムが多数を占める地域があり、その他の地域でもムスリムと混住している多数の非ムスリムがいることを忘れてはならない（モンゴルを中央ユーラシアに入れるならなおさらである）。さらに根本的な問題としては、イスラーム復興やイスラーム運動が盛んになればなるほど、何が「正しいイスラーム」であるかをめぐって争いが起き、同時に大国や現地政府による攻撃や取り締まりが強化され、ムスリム社会は分裂し弱体化する、という現実がある。これは、現代イスラーム世界を観察する上で極めて重要なポイントである。また、中央ユーラシア地域研究において想定すべき隣接世界は、イスラーム圏だけでなくインドや中国も含むことを付け加えたい。

近年の「中央ユーラシア」が地域として実体的な意味を持つとすれば、それはまず、ソ連（ロシア）中央が内向きになったことによって捨て置かれた地域という共通性を持つからである。まさに「遠心力」である。しかしこの共通性は全く消極的なもので、積極的な意味での共通性の形成（地域統合なり、価値観の共有なり）が進んでいるとは言えない。むしろこの地域の成立の上で重要な意味を持っているのは、ここが、さまざまな大国や隣国（どちらかといえば前者が中心である）が関与し力を競う場となっていることだろう。

だがより根本的には、「中央ユーラシア」は実体というより「まなざし」によって成り立つ空間である。そもそも現地ではまだこの言葉はあまり普及しておらず、むしろ欧米や日本でよく使われるようになっている。その背景としては、中央アジアやコーカサスを研究する学者たちがより大きな地域名称を使って存在感を示そうとしていることや、欧米などの政府が、新しい外交相手である中央ユーラシア諸国をまとめて扱おうとする傾向が指摘できるだろう。

つまり「中央ユーラシア」は、曖昧さやある種のご都合主義を含んだ言葉であるが、逆に言えばそれだけに、実態に束縛されない分析概念として柔軟に使える。問題発見のための概念と言ってもよい。もともとこの言葉は、ユーラシア大陸の内陸部でいわゆるウラル系・アルタイ系の言語を話す人々が住む地域を指す言葉としてデニス・サイナーが使い始め、その後さまざまに意味を変えながら主に歴史研究の中で使われ、最近では現状分析でも使われるようになった言葉であ

る。歴史研究の文脈に限っても伸縮自在な概念であるが、基本的には、ステップ遊牧民地域と彼らに接する定住民地域の複合体であり、強い共通性で結ばれた地域というよりは、「場」としての地域である。遊牧民の諸帝国が栄えた時代は中央ユーラシアの拡大の時代と言えるし、ロシアや清朝が拡大した時代は中央ユーラシアがそれらの帝国にのみ込まれていく時代であった。しかしいずれにしても、中央ユーラシアは常に境界のはっきりしない、開かれた世界であり、ロシアをはじめとする隣接地域と密接な関係を持っていた。また中央ユーラシア世界、イスラーム世界、ロシア帝国のそれぞれの枠で、あるいはそれをまたいで、商業、宗教、行政、知識、改革運動などさまざまな面でのネットワークが機能していた。それらの広がり进行を考察することで、中央ユーラシアという地域の特質を見出していくと同時に（地域概念の構築）、それ以外の多様な地域設定のあり方を模索していくことができるだろう（地域概念の脱構築）。

中央ユーラシアという地域設定は、スラブ・ユーラシアという地域設定と矛盾するものではなくない。歴史的に見れば、中央ユーラシアにおける覇権がモンゴル帝国およびその後継諸政権からロシアに移ったことを端緒として、スラブ・ユーラシアが形成されたと言って間違いない。そして現状について言えば、中央ユーラシアの一体性が弱いことは、この地域がロシア抜きには理解できないことと表裏の関係にある。たとえば、中央ユーラシア諸国がお互いについて、また世界情勢について情報を得るのは、いまだにロシアのメディア経由であることが多い。同時に、国際関係において地政学的な見方が重要性を増す傾向は、スラブ・ユーラシアの他の諸国が中央ユーラシアに対して持つ関心を再び強めさせている。ロシアについては言うまでもないが、カスピ海の資源やチェチェン戦争、アフガニスタン問題は、中東欧・南東欧諸国にも、社会主義時代とは違った形で中央ユーラシアへの関心を持たせている。

総論としてまとめれば、「中域圏」は、中東欧、中央ユーラシア、極東・シベリアといった地域が一見社会主義体制の崩壊によって成立ないし浮上したもののよう見えながら、実はさまざまな歴史的遺産を基盤としていることを明らかにし、同時に、これらの地域が歴史的にも現状においても、外部世界に開かれつつロシアと切り離しがたい関係を有していることを確認することによって、スラブ・ユーラシアという地域設定の有効性を証明することができる概念だと言えるだろう。